甲府ルーテル教会にて（１）

信

――ロマ書第８章１～17節――

１９７６年８月15日（甲府）
小池辰雄

終末的な現実　神の根源語　聖書はドラマ　信の主体はキリスト　神に無条件に然りと言って平伏すこと　キリストは無者　「ひと」は「霊止」　信交　キリストの砕け　開かれたる門　南無キリスト　十字架を体受する　山上の大告白　同化現象　信行一如　神さまの本願の力　天地正大の気　幸いなるかな、霊の貧しき者　キリスト神秘　霊界の法則

【ロマ８・１～17】

１この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。２キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。３肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。４これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。５肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。６肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。７肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、８また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。９然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。10若しキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。11若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活し給わん。

12されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。13汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。14すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。15汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。16御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとと

もに栄光を受けん為に、その苦難(くるしみ)をも共に受くるに因る。

●終末的な現実

今日、８月15日はご承知の通りの日で、終戦といいましても、日本がアメリカやソ連に無条件降伏してポツダム宣言に従ったんですけれども、しかし、本当は無条件降伏は神さまの前に無条件降伏すれば大変なことになったと思う。そこまで突き抜けることができなかったということが非常に残念な事態です。「一億総懺悔(ざんげ)」なんていう言葉もちょっとあったけれども、空念仏で、日本は神さまの前に本当に平伏せば、素晴らしいことになって、ドイツにも負けないことになったはずなんですが、残念ながら、日本の今の精神的な現状は下り坂に向っている。経済成長と正反対であります。

私も教育界に50年近くおりますので、いろんなことを感じていますが、要するに最も責任のあるのは教育者です。教育者自身が、魂が絶対界との繋がりを持っていない。神さまでも如来でもいい。とにかく、絶対界との繋がりがない。そういうのが大方の事態です。これでは実は教育は成り立たない。人間の営みはすべて、人間の主体は魂が主体ですから、魂の世界が本当でなければ、政治でも経済でも学問でも医学でも何をやろうと、結局、本ものにならないわけです。

宗教現象は決して他の文化現象の一つではなく、その根元である。宗教の世界は根っこの世界です。幹は道徳の世界、枝と葉と花と果はもろもろの文化文明の現象です。目に見える文化文明の方は、いろいろ研究したり工夫したりしてやっていくことができますけれども、目に見えない宗教の世界は根っこですから、これを取り出したら、木は枯れてしまう。見えない世界を本当に受けとっていかなくてはいかん。そのことだけをみんなしないわけです。ですから、日本に限らず、キリスト教国といえども、今、世界的にキリスト教も仏教も全体に非常に頽落している。

このままでいけば非常に危ない。原子力の核兵器がもし一端使われたら、世界はお終いという。火山がいつ爆発するか分からない、火山口の周りを回っているようなわけです。そういう現状である。日本はなにか非常に平和的で安閑としているようなのはとんでもないはなしです。

そういう意味において、非常に終末的な現実である。このことに特にキリスト者がしっかり気がついて――今はもう教育者はダメですから――クリスチャン自身が、お一人お一人が魂の教育を次の時代の人にやっていかなくてはいかん。クリスチャン自身が本当に一人びとりが教育者であり伝道者である。こういう自覚を持っていかなくてはいかんと思うわけです。

信仰と希望と愛と、三回、大体そういった中心でお話したいと思います。

●神の根源語

今日、８月15日は、我々が神さまの前に無条件降伏した日でありますが、もう一つ、今日は大事な日なんです。１５４９年８月15日、鹿児島にやって来た人がある。有名なザビエルであります。あのザビエルは霊的な伝道者です。その点では、マルチン・ルターもおそらくかなわない。フランシスとかザビエルというのは第一級の使徒的な信仰の人物です。ザビエルがポルトガル語でしゃべっても、日本人にはわからない。けれども、彼の言葉の意味ではない、その響きにうたれるわけです。福音の世界は実はこの響きなんです。音楽の世界が響きですけれども、神の言は霊的な響きを持っている。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが言われた。しかし、キリストの言を、「どういう意味か」と意味を研究して、聖書研究会というのがたくさんあります。私が育った無教会というのも聖書研究会をやっていて、内村先生の雑誌も『聖書之研究』という。頭のいい人がたくさんいる。そして、「ギリシア語だ、ヘブライ語だ。参考書だ」というわけで、そういった研究のいきとどいている人が聖書をよりよく深く分かるという、暗々裏にそういった気持になっている。冗談じゃない。そんなことをやっているから、観念信仰になってしまう。日本語の聖書でたくさんです。誤訳もあるでしょう、いろいろあるでしょう。けれども、聖書はギリシア語でもヘブライ語でもない。なるほど、書かれたものはギリシア語とヘブライ語でしょう。語られたものはみんなヘブライ語です。新約でもアラミ語ですから。キリストのじかの言葉はアラミ語です。

「死者をして死者を葬らしめよ」

も――これは私は聞いた話ですけれども――アラミ語では、

「死者は葬儀屋に任せよ」

とキリストは言われた。「マッター」（死者）と「ミッター」（葬儀屋）という言葉で、母音が違うだけの語をギリシア語にするときに間違えたらしい。キリストは、

「死者は葬儀屋に任せて、お前は神の国を伝えろ」

と、何でもないことを仰ったのを、一般にはえらく何か深遠な解釈をするけれども、キリストはなにも深遠なことを仰ったのではない。私はアラミ語を知りませんけれども。パウロもヘブル人にはヘブル語で語った。

けれども、神の根源語というのは、ヘブライ語でもギリシア語でもない。その奥の言葉です。その奥の言葉が読めるようになったら、それは本当に聖書を読むことになる。では、それを読ませるものは何かと。それはだんだんお話します。

●聖書はドラマ

どうぞ、みなさんは、いわゆる聖書の意味の詮索はよしてください。というのは、聖書

はドラマ、劇なんです。シェイクスピアは偉大な世界第一の劇作家だけれども、聖書という大劇は――オラトリウム、神の神劇――イスラエルの歴史を通しての、光の世界が闇の世界を光に変えようとする立体的な多次元的な劇ですから、こんな面白い本はないわけです。文学中の文学なんです。どうぞ、教訓の教えの本とは思わないでください。

「キリスト教」なんていう言い方がそもそも躓きになる。私は「キリスト道」と言っている。日本人は道の民でしょ。茶道、弓道、剣道、柔道、書道という。道です。どうして、日本人は古来の大事な表現と、そういった大事な角度を捨ててしまうのですかね。道というのは、真理が身につくことを道という。頭でものを言っているのではない。

どうぞ、動的なつかみ方を、それから劇的なつかみ方をしてください。神学でも「組織神学」という。私も組織神学会の一員ですけれども、「組織神学」という言い方が私はそもそも嫌いなんだ。神さまの真理が組織でなんか組み立てられるかと。神さまの真理はドラマチックな劇的なもので、渾然たる有機体的なものですから。私みたいな素人が、かえって素人だからおそれなくものが言えるわけです。専門になると、何のかんのいろんなことを考えるから、かえってダメです。

劇中の劇は特に新約聖書の福音書です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、これは何といっても聖書のアルファでオメガです。キリストのじかじかの言葉とじかじかの実存、行為です。

●信の主体はキリスト

「信仰」という言葉は――一般の言葉だから「信仰」という言葉を使いますけれども――神さまを信じ仰ぐという。結構ですよ、もちろん。これは大事な角度ですから。けれども、「信仰」という言葉はまた躓きになってしまう。「まぁ分からないけれども、信じておこう」なんていうわけで。

この「信」という字は、「言」が「人」となっている。ヨハネ伝の第1章1節に、

「初めに言（ことば）あり。言は神と偕（とも）にあり。言は神である」

とある。「言」は「ロゴス」という字です。キリストが即ち、神の言である。神の言が人となった。だから、「信」は実はキリストを表している。受肉の事態がヨハネ伝1章14節に書いてある。「信」とは即ち、「信」の主体はキリストであって、私たちの側の何か心理的な心の状態の「信」というようなことではない。すぐ、「信念」と間違えて困る。そういうことではない。実体なんです。キリストという実体、キリストという信です。

●神に無条件に然りと言って平伏すこと

旧約では、

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となし給えり」

とある。アブラハムはエホバに、ヤハウェーの神に対して、「アーメン」（然り）と言った。

そうしたら、神さまをこれを「セデカー」「セデック」（義）となしたという。神に「アーメン」と言ったら――この「信」という字は「アーメン」という字で「エメツ」という――そうしたら、神さまはそれを「義」となしたという。

神・キリストを「信ずる」とは、「それは本当だ」と言うことは、「自分はダメだ」と言うことですよ。「自分もそう思う」ではない。自分の判断や経験や知情意の世界、これを否定し乗り越えていく。

「神さま、あなたの仰ったこと、あなたのなさったこと、それに対して無条件に受けとります」

と言うときは――さっき無条件降伏と言ったが――自分が無条件降伏しなければ、本当の信は出てこない。こちら側の相対的な善さなんてものを考えているうちはダメなんです。そういう気合が非常に大事です。

今の若い人は、すぐ「自主だ、自由だ」と、自主性を言う。教育の方でもよく言っている。「自由、民主」なんて。みんなこっち側になっている。どこに本当の自由があるかと。もし、自由のことを知りたかったら、何といってもマルチン・ルターの『キリスト者の自由』の本は読まなくてはいかん。

無条件に神さまに「然り」と言うことは、己に対して「否」と言うこと。「信ずる」とは、神に無条件に然りと言って平伏すこと、自分を投げ捨てること、これが「信」なんです。「まぁ大体分かってきたから、信じよう」なんて、そんなことではない。

アブラハムは子どもがない。それなのに、神さまは、

「お前には、空の星のごとく、地の砂のごとくに子孫ができる」

と仰った。アブラハムには分からない。アブラハムもサラも常識的にはもう年齢を越えている。けれども、それを乗り越えて、神さまに、

「然（しか）り」

と言ったらば、

「よし（義）」

と神さまが仰った。

●

神と人との関係が、神を百％に立てて自分をゼロにしているところが、「信」であり、「義」である。神の御意を「然り」と言うのが「義」なんです。キリストは義人中の義人です。パウロが、

「義人なし、一人だになし」

と言った。それは神さまを百％にして生きる人は一人もいないということ。ナザレのイエスだけがそれをやった。だから、自分を何者とも思っていないから、私はキリストのことを、

「無者」

という。自分を無としていらっしゃった。これは虚無ではない。実存的な無ですから。自分を何者ともしてないで、神さまを百％に受けとったその姿が「無者」なんです。そうすると、神さまの一切が入ってくる。だから、無即無限無量という。即無限無量なんです。この垂直関係、この縦の関係、絶対者との関係、絶対界との関係がこのように立たなかったら、人間は本当でない。

●「ひと」は「霊止」

辞書の『大言海』をみると、昔の人は「ひと」という字を、

「霊止（ひと）」

と書いた。「霊（ひ）が止（とど）まる」と書いた。受霊（うけひ）というでしょ。古事記あたりにも出ている。「ひと」というのは神霊の止まっているのを「霊止（ひと）」という。神さまを受けとると、この神さまの実質がここに入ってくる。新約的にいえば、それが聖霊なんです。

「信」の世界というのはまさに信義一如なんです。キリストは神さまを百％に信じ受けていた。彼は即ち、信なる霊止（ひと）であった。だから、彼は義人である。義人とは道徳的に義（ただ）しいということではない。神の御意（みこころ）を百％に受けて、

「汝の御意（みこころ）を成させたまえ」

と言う。キリストは、

「この我を通して」

と、仰らなかった。けれども、キリストは、「この我を通して」なんですよ、隠された言葉は。

「どうぞ、この私をお使いください」

と、挺身している。最も烈しい祈りです。自分を投げ捨てている祈りなんです。「御意を成させたまえ」ではない。「御意を成させたまえ」と言って、ただ傍観しているようなのは、ひとつも「御意を成させたまえ」その祈りですから、最も烈しい祈りです。自分の願いに絶している祈りなんです。

それが「信」の世界です。だから、信ほど実はもの凄い現（うつつ）はない。「信即現」と私が言うのはそのことです。根源の現実なんです、信の世界は。最も現の世界です。「ここに本がある、花がある」というよりかもっと現実の世界です。

いつもキリストの在り方を見てください。私は、「あなたの宗派は何か」と問われると、

「私はプロテスタントでもカトリックでもない。アポストーリッシュ（使徒的）だ。キリストの直弟子の信仰の次元に私は生きたいので、プロテスタントやカトリックを否定しているのではないけれども、その元の直結のところだ」

と答える。「原始福音」と言い出したのは私なんです。キリストの「ウルエバンゲリウム」（原始福音）という言葉をドイツのダイスマンという学者があるところで使っていた。私はそれ

を見てから言ったのではない。「ああやっぱり言っているな」と思った。キリストに直結する。そうなったら、プロテスタントやカトリックのそれぞれの善さだって何だって見えてくる。

（無教会の聖霊以前の話、省略）

●信交

では、ロマ書8章を、「信・望・愛」ということを中心にしてお話しましょう。

1この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2キリスト・イエスに在る生命(いのち)の御霊(みたま)の法(のり)は、なんじを罪と死との法より解放(ときはな)したればなり。

まず、その前のローマ書7章は、パウロが非常に苦悶しているところの地獄の苦しみの世界です。ところが、忽然として、ローマ書8章は天国的なもの凄い世界です。コントラストをなしている。イザヤ書でいうと、イザヤ書の34章と35章がそうなんです。イザヤ書の34章が地獄の世界、35章が天国界。ちょうどそれと似たようなところがこのローマ書7章と8章です。

マルチン・ルターもローマ書7章式な苦しみを経た。それで彼は突き抜けた。何といっても、パウロの信仰を一番深く、その構造と質において受けとっているのはルターでしょうね。だから、宗教改革が――彼は改革しようと思ったわけではないけれども――自然に成ってしまった。

「今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることがない」

と。「キリスト・イエスに在る」という、この「に在る」という言い方が大事です。

「キリストの中に在る」「エン・クリスト」

ということ。旧約の世界では、

「エノク、神と偕(とも)に歩いたら、居らずなりき」

なんていう。旧約では、「偕に」です。キリストは神の「中に」いました。ヨハネ伝1章の終りの方に出ている。

「神の懐に居ったところの独り子」

という。キリストは神の懐の中に、神の中にいた。私たちは、「キリストの中に」です。パウロは、「キリストの中に」と言った。この相互内在関係の、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

「われ汝の中に、汝わが中に」

という、中の相互関係です。そういう「中に」入るまでは、信は本ものでない。だから、「信仰」の「仰」の字が躓きになる。仰いでばかりいたら。むしろ、「仰」の字は「交」に変えて「信交」と書いたらいい。霊的な交わりの世界、信じ交わる世界、この「中」の世界です。

●キリストの砕け

そこで――私たちはいくら力んで、「中に」なんて言ったってしょうがない――さっきから申し上げているとおり、いつもキリストを見る。キリストは神さまの中にいた。どうやって、キリストは神さまの中にいたんでしょうね。祈りの世界です。祈りとは、何かお願いすることではない。祈りとは、祈り入らなくてはダメ、祈入しなくてはいかん。祈り入る。自分を投げ入れることなんです。

「己を捨てる」なんてよく言いますね。どこへ捨てるんですか。そこへ捨てたってしょうがない。キリストの中に捨てる。キリストの中に自分を投げ入れるんです。

「真実」は相対的な真理はありますけれども、「真実」にこだわってはいかん。私が「砕け」に来たのはその意味です。ところが、人間は、「私は砕けた魂になりました」と言えますか。なるほど、あるときは砕けるでしょう。けれども、またこれが傲慢になったりする。人間の側はどれも当てにならない。「信仰」も当てにならない。人間の側を当てにすることができるとしたら、キリストは十字架にかからなかったんです。人間の側は何ものも当てにならない。しょうがないんです、これ。それが「罪」なんです。だから、

「その当てにならないお前の砕けも全部引き受けた」

というのがキリストの砕けです。キリストの十字架です。我執というやつが、自己本位というやつが罪なんですから。どんなにそれが立派なものであっても罪なんです。人間的な立派さなんてものを問題にしているうちはダメなんです。

時々、指導者が非常に立派だと、指導者をしらないまに崇めてしまうんだよな。キリストのかげが薄くなってしまう。なるほどそれは無難でしょう。けれども、実は本当の福音からはズレてしまう。

「お前の砕けきれない、その我執を全部、私が砕いてしまった。傲慢でも、分裂でも、何でもいいよ。私のところに来なさい。私が門だから、この門の中に入りなさい」

と。「門構えに十」の字、これは大言海にもこんな字はない。これは私が作ったんだから。キリストという門は十字架という門なんです。

「求めよ、叩(たた)け、さらば開かれん」

という。この門はノックしたって開かない。十字架に体当たりしてくださいよ。そしてぶっ倒れなければ開かれない。キリストの十字架にぶつかって、

「われキリストと共に十字架せられたり」

となると、この門は開ける。そうすると、その先は何かというと、これは聖霊の光が燦々たるところの世界。詩篇23篇のごとき緑の憩いの渚(みぎわ)、その現実は聖霊の天国です。

祈りの世界でもって、なるほど自分を投げ入れる祈りになったときに、この「中」が出てきた。けれども、直接的に投げ入れられない。十字架という門を通さないと。もし、直接に投げ入れたら、これは一種の神秘主義になる。

●開かれたる門

十字架というこの門は実は、もう開かれていたんです。逆説的な言い方をすれば、開かれたる門に体当たりすること。そうしたらば、キリストはどんな人でも入れる。

十字架上の盗賊がそのことを証明したではないですか。キリストの十字架の左右に二人の盗賊がかけられていた。片方は傲慢で、

「**お前は神の子なら、俺たちも一緒に救ってくれたらどうか**」

と言った。もう片一方は、

「**お前は何を言うか。俺たちはさんざん悪いことをしたから、十字架にかけられて当然だけれども、この人は何も悪いことをしていない**」

と諌めて、キリストに、

「**せめて、あなたが御国に入りなさるときに、私を覚えてください**」

と言った。これはマイナス99の生涯を送ってきて、最後の瞬間に砕けた。キリストは、

「**お前は今日、私と一緒にパラダイスだよ**」

と仰った。この砕けの魂が十字架のキリストと一緒に真っ先に天国へ入っていった。

このキリストの十字架の砕け。砕けざる我々のために本当に砕けてくださった。無条件にそれを受けとることが「信」なんです。もう過去・現在・未来の自分がどうだって、そんなことはいい。もうひとつ奥の現実で、私はハッキリ救われている。

「救いの確かさ」なんて言いますけれども。キリストが、

「**信仰うすき者よ**」

なんて言うものだから、「ひとつ厚くなろう」と思って一生懸命でやろうとする。このキリストの言葉に躓いてはいかんですよ。

「自分の信念、自分の信仰なんてものに絶しろ。私の信をお前にやるぞ」

「はいっ」

と。キリストの信をいただく方が一番いいではないですか。間違いないじゃないですか。全キリストというものがそのまま私たちに――マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに出ているキリスト、復活のキリスト、聖霊のキリスト、再臨のキリストが――みんな迫ってくる。このキリストという方は宇宙よりか凄い。宇宙的なキリストですからね。それを人間の作りあげた神学概念なんかで組織的になんかできるものじゃない。

●南無キリスト

普通は信仰に入ると、狭くなってしまって困るかと思う。冗談じゃない。広大無辺です。私は仏教のことでも何でも勝手にしゃべる。ということは、このキリストの中にみんな入ってしまうから。そうすると、「あれは仏教とキリスト教を混淆（こんこう）している」なんて。冗談じゃない。全部、キリストの中に入ってしまうんです。仏教にはいい言葉があるから、私は勝手に使

うわけです。

「南無阿弥陀仏」

という。「阿弥陀」「アミッター」というのは無量寿無量光ということだそうです。限りなき生命、永遠の生命。無量の光。

「我は生命なり、我は光なり」

とキリストが言われた。だから、キリストは「阿弥陀」さんだ。本当の「阿弥陀」さんはキリストです。「南無」というのは帰入、帰依、帰り入ること。キリストの中に帰入、祈入する。キリストは「アミッター」の覚者だから。「阿弥陀仏」というのは実は、私たちにとってはキリストです。まぁ、「南無阿弥陀仏」と我々は祈るわけにはいかんよな。だから、仕方がない。私は、

「南無キリスト」

と祈る。みんなの前では「南無キリスト」なんて祈りませんよ。私は自分の祈りの中では、無言の中に「南無キリスト」です。キリストの中に祈入する。

仏教のものでも、一流の坊さんのものは私は読むことが好きです。みんなキリストの光で分かってしまうから。日蓮さんはなぜ他宗を排撃したか。日蓮さんは素晴らしい坊さんです、「南無妙法蓮華経」も。彼が本当に「南無妙法蓮華経」と称えたらば、龍の口で斬ろうとしたやつがぶっ倒れてしまったではないですか。あれは本当ですよね。彼にはそれだけの霊的な如来の霊がかかっているわけです。佐渡へ渡るときには、「波題目」といって、波が鎮まった。それだけの素晴らしい坊さんですよね、日蓮さんというのは。けれども、なぜ他宗を排撃したか。

他の宗派にもみなそれぞれ真理が来ている。絶対的なものは、我々人間の側においては――ちょうど太陽の光は白光だけれども――紫色になったり、赤になったり、黄色になったり、青になったりするさ。けれども、みんなこれは光を持っている。色彩はちがっていても、同じ光を持っている。それが聖霊の世界なんです。元は白光なんです。だから、「お前は赤くてけしからん。俺のように黄色くなれ」なんて、そうじゃない。赤の中の光を見ろ、黄色の中の光を見ろと。これは共通なんだ。だから、聖霊が来てれば、どの教会にいようがそんなことは問題ではない。それを教派でもって、イズムやセクトでもって、なぜ喧嘩しますか。人間の側の特殊性、相対性は仕方がない。けれども、

「その中に本ものが来ているか」

ということだけが問題なんです。

そういう信の世界。「中」というのは、十字架を通してその中に入ると、それはもう聖霊の世界ですから。十字架と聖霊は離すことができない。

聖霊の世界は二千年前も今も同じことです。「使徒行伝は、あれは仕方がない」なんていうのではない。質的には同じものが来るんです。ただ、彼らは本当に素晴らしいですから、

かないやしませんけれども、質的には同質なものがくる。

●十字架を体受する

パウロが引っくり返されたのは何ですか。パウロが信仰に入った。律法に対しては彼は非常に熱心だった。これは神に対する熱心であった。この神に対する熱心というのは危ない。自分に熱心だから。そして、モーセの旧約聖書の律法に逆らうやつを片っ端からとっ捕まえて牢屋に入れた。ある意味においては、彼は殺人犯だ。けれども、甦りのキリストはちゃんとパウロという人物を見ておられた。

「お前はとんでもない間違いをしている。お前のその熱心はいいけれども、我執的な熱心はいかん」

と。言ったって分からないから、とうとう、ダマスコ途上で彼を引っくり返した。パウロはステパノのあの殉教の死を見ながら、なおいきり立っているんだから。ステパノは第一の殉教者、素晴らしいキリストの証人です。実はステパノは彼を救うひとつの暗流となっていたでしょう。彼はそのことに気がつかなかったのでしょう。それがキリストに撃たれて、三日三晩、目が見えず耳が聞こえず。完全に無条件降伏したわけだ。アナニヤによって――アナニヤにもちゃんと示されている、こういうのが来るからと。ああいうことはみんな本当なんです――按手されて、

「我が眼より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と。そして、彼は荒野に行って祈ったでしょ。それから本当に始まった。

キリストもどうですか。神の子でありながら、洗礼者ヨハネから水のバプテスマを受けながら――ヨハネから受けたのではない。天から来た――彼は同時に聖霊のバプテスマを受けてしまった。もともと聖霊のひとですけれども。

だから、悔い改めのバプテスマではなくして、聖霊のバプテスマです。ヨハネはそのことをもう予見していたから、

「この人は御霊と火をもってバプテスマするひとだ。私は水でバプテスマする けれども、けたが違うんだ」

ということを、洗礼のヨハネは言っている。

今の一般のキリスト教は、聖霊のバプテスマを受けないで、どうなんですか。パウロが言っているでしょ、このローマ書８章で。

「御霊を持たざる者はキリスト者にあらず」

と。偽りとは言いません。けれども、誰でもがいつかこの聖霊の世界に――現象はどうでもいいですよ――根源の世界に入らなくては。

それはなにも難しくない。本当に十字架を身体で受けとる。体受する。信受という言葉は、私はむしろ体受と言う。全存在で受けとる。そして、あなた方は、本当に自分でその中に入っ

て、キリストの中に、自分をこの十字架の下に入れてごらんなさい。全身が涙になる。全身が痺れますよ。

●山上の大告白

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。キリストの山上の垂訓の第一の言葉。けれども、それを真似しようとしたってダメなんだ。あれは、キリストは教えているのではない。みんな自分の体験を仰っている。だから、私は「山上の垂訓」とは言わない。「山上の大告白」と言う。キリストの大告白です。キリストは決して、一語といえども自分の体験に基づかないことは仰らない。

お釈迦さんも言ったでしょ。

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

と。なぜ、お釈迦さんはそう言ったか。

「お前たちが体験するまでは、私がいくら言ったってダメなんだよ」

ということです。だから、「一つも説かなかった」という逆説的なことを言っている。キリストは霊が貧しい。即ち、霊が貧しいとは神さまの前に自分を何者ともしなかった。ヨハネ伝に書いてあるとおりです。

「私は何もできない」

と。マルコ伝10章でも言っている。「善き先生」と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と。ああいう言葉は大事な言葉なんです。キリストは自分を「無善」としていた。神の善が入ってきた。「無教」としていた。神の言葉が入ってきた。「無能」としていた。神の能力（ちから）が入ってきた。みんなそうです。みんな「無」が付くから、だから、私は「無者」と言う。どこがわるいか。私は自分でもって勝手に言っているのではない。ちゃんと聖書に基づいている。ただ表現がちょっと普通と違うだけのはなし。

キリストの中に十字架を通って入っていくことが、これが本当に「キリストを信ずる」ということ。ヨハネ伝６章の28節、

「[28]**ここに彼ら言う『われら神の業（わざ）を行わんには何をなすべきか』**

「神の業」というのは複数で書いてある。

[29]**イエス答えて言いたもう『神の業は**

今度は単数です。

その遣し給える者を信ずる是れなり』」（ヨハネ６・28～29）

「神の業は信ずることである」と。妙な言葉ですね。

●同化現象

そこで、ルターさんの「ローマ書序文」の中の言葉をちょっと引用します。二つある。

「信仰は、魂が神の言に同化するほどに溢るるばかりの恵みをもって魂に自由と救いとをもたらすばかりでなく、信仰は魂をキリストと一つにすること、あたかも新郎が新婦と一つになるようなものである。このような魂の結婚から聖パウロが言っているように、キリストと魂とが一体となる結果が生ずるのである。」

非常にうるおいのある素晴らしい言葉ですね。

「信仰は魂が神の言に同化する」

と、彼は言っている。この同化現象です。

「わが言は霊なり、生命なり」

と、キリストが発した言は「霊なり生命なり」という。それから、キリストの行為も「霊なり生命なり」ですよ。キリストは言だけを仰ったけれども。キリストの行為はみな「霊なり生命なり」です。もの凄い霊的な生命を持っているから、盲人は目が開いてしまうし、癩病人は清まるし、死人も甦ってしまう。

「我に躓かざる者は幸いなり」

という。跛者が立ってしまう。キリストの霊が来たら、ペテロがそれをやったでしょ。

そういう、キリストの言も行も、「霊なり生命なり」です。日本人は、

「言うは易く行うは難し」

と聞いているが、そういうのはやめた方がいい。その言も行もどこから来ているかというと、霊の世界から来ている。神の霊から。これは霊言であり霊行である。だから、口に発しては言となり、手足に発しては行となるだけのはなしです。出ているところが違っているだけのはなしで、元は一つなんだ。だから、信とはそのような元であるキリストに――キリストの元は神さまですけれども――そのキリストの中に、キリストの言に、行為に、それに同化してしまう。その中に同化するには、その中に自分が入らなければ同化しない。

「神の業は信ずるこれなり」

というのは、そういった神さまの業がなす。神が主体、キリストが主体ですよ、向う側が。こっちは受ける方。神さまの方は能動、こっちは客体、受動、受けとる方です。

日本で受けとる信仰の素晴らしかったのは法然、親鸞だね。親鸞の『歎異抄』は素晴らしい。親鸞の『歎異抄』とマルチン・ルターの『キリスト者の自由』は東西の双璧と言いたいような文章です。

この神さまが我々の中で業するんです、自分を投げ入れると。投げ入れざるを得ない。投げ入れないでどうするんですか。あるがままにぶっ倒れているのは、こんな易しいことはない。

もうひとつ言いましょうか。私たちは今、どこにいるんですか。空気の中にいる。空気

の中にいて、空気を吸っている。肉体は空気に包まれて、空気によって常に浄化されている。私たちの自然的生命というものは全く空気によっている。気です。肉体は空気による。魂は霊気によるんです。無意識に私たちは空気を吸っている。私たちの魂が無意識に霊気を吸うとはどういうことか。祈り心になることです。言葉で祈ることばかりが祈りではない。キリストはどういうひとですかと聞かれると、私はただ一言で、彼は祈りのひとであったと言います。常に神さまの中で祈りの呼吸をしているひと。夜もすがら祈ったりしますよ、キリストは。そして、翌日は海の上を渡ってきたりする。

●信行一如

神の業はキリストを全的に受けとることである。「信ずる」ということは、実は一番内的な行為だ。一番烈しい内的行為を「信ずる」と言います。だから、私は

「信行一如」

と言う。そこまでルターは言ってないけれども。信ずるとは全存在的な内的な行為であります。

なぜ、投げ入れられるかというと、キリストはちゃんと門を開いて、

「来なさい」

と言っている。神・キリストという電極は、私たちをこの霊的な磁性をおびたところの磁石にしようとしている。聖霊がくると磁石的存在になる。人間だから、滑ったり転んだりするよ。けれども、必ず向くところはキリストになる。聖霊という磁性を帯びているから。磁性をおびていないクリスチャンがたくさんいるから困る。そして、「研究、研究。意味はどうだ」なんてやっている。

実は、信行一如なんです。「如」という言葉はいい言葉だね。「如」というのは「ごとし」ではない。合一的な状態を「如」という。神秘的な合一体。信行一如。なにしろ、本当の世界はみんな「一」なんです。分裂してない。

キリストが一番喜ばれたのはどういう人たちでしたか。立派な人たちでしたか、パリサイでしたか。一番嫌いだったのはパリサイ、自分を立派だと思っている連中。跛者だとか、盲人だとか、遊び女だとか、取税人だとか、それらをなぜキリストは受けとったかというと、彼らがみな投げ込んできたからです。あるがままに自分を投げ込んできたから、百％にキリストは受ける。大事なのは、自分の全存在をそのまま投げ入れること。何もとりつくろう必要はない。

「もっと信じてから、もっと聖書を研究してから、もっと善いことをしてから」

ではない。今、ここにおいて、直ちにという世界です。

そういう投げ入れの事態を本当にもたらすものは、神さまがキリストにおいて働いたこの業、

「神の業はこれを信ずることなり」

ということです。

だから、マルチン・ルターは別なところでこう言っている。さすがはルターさんです。

「ところが（まことの）信仰は我々の中に於ける神の行為であって、この行為は我々を変革し、新たに神から生れしめる。それはヨハネ福音書1・13にあるように。そして旧きアダム（生来の我れ）を殺し、我々を心に於て、情緒に於て、思惟に於て、またあらゆる能力に於て全く別人にする、しかも聖霊を自分と共に齎（もたら）すものである。噫、信仰とは何と生き生きした能動的な、活動的な、有力なことがらではないか。であるので、間断なく善きことを実現しないではいられないのである。信仰は善き行為がなされ得るか否かを問わない。そんな問いを発しないうちに信仰は善き行為をなしてしまっている、そして絶えず行動している。」

と。ルターのこの気合は、正に本当に受けとると、行はおのずから派生してくる。

「行為なき信仰は空しい」

なんて、ヤコブ書にあったかもしれない。けれども、あれはやはりまだ多少、二段構え的になっているけれども、私に言わせると、信が即、行なんです。いわゆる行為はそれの派生したもの。だから、行為も信と言ったっていい。

アブラハムのところを見てもそうです。アブラハムが今度は、創世記22章になると、その独り子をもらった。そうしたら、

「お前はそれを献げろ」

と、とんでもないことを神さまは言われた。アブラハムはそれに対して何と言いましたか。何も言わない。直ちに行動に出た。神さまはあまりにも分からないことを言うけれども、問い返しもしなければ、はいとも言わない。彼は直ちに支度を始めて、薪を共の者に担がせて、イサクを連れて行ったではないですか。イサクとの会話でも、

「お父さん、どこに犠牲の小羊がいるんですか」

「今に神さまがいいようにする」

と。アブラハムはとぼけてそんなことを言った。15章は、「エホバを信ずる」という世界。今度は22章では、アブラハムは「信ずる」とも言わない。行為でもって直ちに従っている。あれがアブラハムの本当の信です。

そうするとヤコブは、

「アブラハムは行為によって義とされた」

と言った。パウロは、

「アブラハムは信仰によって義とされた」

と言った。そうすると、ルターは、

「ヤコブは間違った。行為でない。信仰だ。あれは藁の書簡だ」

なんて間違えた。ヤコブが行為と言っているのは、その信の世界から言っていると私はとっていいと思う。ヤコブの言い方も、パウロの言い方も、元はみんな聖霊から来ているから、表現の仕方がちがっても、そこがちゃんと読めてこなくてはいかんですよ。それが本当の有機体的だということです。信行一如ということ。信という世界がそんなになってきた。

●神さまの本願の力

仏教で「本願」という言葉があるでしょ。「本願の劫力（ごうりき）」という言葉がある。親鸞の言葉だ。神さまの本願の力がかかってくる。自分を投げ入れるところに。それはもちろんキリストを通してです。「キリストが」と言っていい。パウロが、「神」と言おうが、「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、この三つは離すことができない。まぁそれを「三位一体」と言ったっていいけれども。

「三位一体」と言うと今度は、神学論でもって一生懸命でやっている。なぜ、そのように整えようとするんですか。そうかと思うと、「二体である」とか、「一体である」とか、「キリストは神か、神の子か」なんて一生懸命でやっている人がある。どうして、ただ平面論理でもって神学者というのはやるんでしょうかね。そういう、頭でもって解決できないような深い真理の世界です。どう言ったっていい、言い方は。その奥がちゃんと掴めていれば。だから、一如の世界から無限無量の展開をするんです。

そういう本願の世界、本願の力がこの神の業です。それは実際に体験してみれば分かる。私たちには力がないんだから、ぶっ倒れたらいい。どこに倒れても、空気の中です。私たちの魂も、魂における生命も、どこでどうなろうが、神さまの霊気の中に入っている。

●天地正大の気

「天地正大の気」と藤田東湖が言った。

「天地正大（せいだい）の気
粋然として神州（しんしゅう）に鐘（あつま）る
秀でては不二の嶽（がく）と為（な）り
巍々（ぎぎ）として千秋に聳（そび）ゆ
注いでは大瀝（たいえい）の水と為り
洋々として八州を環（めぐ）る
発（ひら）いては万朶（ばんだ）の桜と為り
衆芳（しゅうほう）与（とも）に儔（たぐ）ひ難し
凝（こ）っては百錬の鉄と為り
鋭利兜（かぶと）を断つ可（べ）し」

という。あの藤田東湖（とうこ）というのは素晴らしい。天地正大の気があって、そのように現象す

るという。大変な言葉です。

「万物は神の霊によって造られた」

と書いてあるではないですか。ヨブ記にも詩篇にも。どうして、そういうことを本気になって読まないのか、本気になって受けとらないか。惜しいですよ。

一番大事な魂の問題が日本ではおろそかになっているから、どうしても、キリスト者がこの使徒たちの次元の質を受けとって進んで行かなくてはいかん。これがあったら、もう何がどうなろうと、絶対不敗です。原子爆弾が爆発して、私の肉体がどこかへすっ飛んでもいい。霊体は絶対にそんなことにならない。

それだけ盛んな信の世界です。「キリストを信ずる」とは、私たちの側の現象は、運命、環境、現象はどうなろうと、そんなことではない。もうひとつ奥の根源の現実、信において既にもう天国を受けとっている。

●幸いなるかな、霊の貧しき者

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国は汝のものなり」

という。キリストの十字架によって私は霊が完全に貧しくされました。無者です、私も。キリストの無者です。これは恩寵だから仕方がない。絶対恩寵だから。私が自分で悟り澄まして無者になったのではないから。相対的人間小池なんてやつは問題ではない。その奥に無者というのが来ているんです。

「幸いなるかな、わが十字架によって霊が貧しくされた者よ。

と。「アーメン、然り」と言って受けとるほかに何があるか。

天国、即ち聖霊の我、なんじのうちにあり」

と。そういうように私に響いてきた。あの山上の垂訓の第一言が身についたら、あとのキリストの言がスーッと読めてしまった。これは天国の鍵なんだ。

キリストは水を割ってものを仰らない。キリストの言を誰か及第できますか。みんな烈しい。一番烈しい言は、

「天の父の全き（まった）如く全かれ」

という。我々は、「天の父の全き如く」在れますか。なぜ、キリストはあんなことを仰るか。それで福音なんて言う。不可能なことを突きつけておいて、福音だなんて言う。「こういう場合にはこうであれ。これくらいでいいよ」なんて仰らない。断言的にものを仰る。なぜですか。

「私の中へ来てごらん。そうしたら、その質が出てくるぞ」

と言うことです。

私は不完全きわまわるやつです。全さなんてのは全然ダメ。私はせいぜい三日月くらいだ。けれども、この三日月は太陽の光を受けている三日月です。これは必ず満月を約束されて

いる。天界において満月となる。皆さん一人びとりもみなそうです。三日月でいい。ただし、三日月が三日月でありながら、これに完全性が来ているんです。完全性が来てなければ満月とならない。その完全性というのが聖霊なんです。聖霊が来ていると、これは必ず満月になっていく。地上では三日月で結構です。必ず満月となる。完全性というものがある。だから、

「父の全（まった）きが如く全かれ」

「はい、全いです。あなたの完全性をいただいています」

と答えられる。現実は、私は破れ器、壊れものです。だから、私は「破れ」と言う。みんなとり澄まして立派そうな顔しているけれども、みんな人間は破れている。魂も肉体も破れている。破れてなければ、永遠の生命です、地上にあって。何年でも生きてください。ところが、破れているから、万人は肉体の死を必ずいつか受けとる。精神的にも肉体的にも破れが本当の人間の現実です。なぜ、正直にそれ受けとらないかと。

本当に破れているということを正直、受けとったら、砕けの魂がやってくる。もちろん、さっき申し上げたとおり、十字架の砕けです。そうしたら今度は、キリストの霊が突入してくるんです。こっちから突入すると――投げ入れると言いましたけれども、投げ入れることは投げ入れと同時に――実は聖霊が向うから突入してくる。聖霊が、この破れの砕けの中に、御霊が入ってくださる。聖霊の突破突入です、十字架を通して。そうすると今度は、聖霊は、どんな嵐が来ても絶対に消えない。どんなに冷たいところでも、暗いところでも、聖霊の火は燃えている。ただし、燃えるには一つの条件が要る。祈っていなければダメです。祈りの魂。また、聖霊が来ていれば、祈らざるを得ない。祈りの事態と聖霊の事態は、これは離すことができません。

「聖霊が来たから、俺はもうだいぶ霊的になった」なんて、いい気になったらとんでもない。そうしたらへたすると、今度はサタンの霊になる。悪霊になる。

サムエルによってサウルが按手された。

「お前は手当たり次第にしていい。神の霊が来ているから」

と。始めはよかったよ。ところが、ダビデという優れた者に対して――ダビデは一生懸命でサウルに仕えていたのに――妬みの気持が起きた。この妬みの気持が起きたら、サタンの虜（とりこ）になって、サウルはああいう惨めなことになってしまった。ダビデも間違いをしてしまった。

とにかく、旧約の世界では、預言者は素晴らしかった。けれども、まだこれも相対の世界。第二イザヤ書なんてのは素晴らしい。あれはもうキリストの預言ですね。一切の旧約の流れはキリストというガリラヤ湖の中に入ってきた。それからまた、使徒たちにみな流れて出る。キリストは霊の湖ですから。

「わが水を飲む者は渇かない」

と、サマリヤの女に言った。信の世界はみなそのような現実の現(うつつ)の世界です。心理的に信じているなんていうことではない。

●キリスト神秘

ですから、さっきルターが言ったとおり、同化現象が起きてくる。聖霊の世界が来なければ、同化現象は起きない。シュバイツァーがパウロのことを書いている真っ先の言葉に、

「パウロは神秘家である」

と書いてある。それはキリストの中に本当に入っている「キリスト神秘」の世界です。ダイスマンが言っているとおり。宗教の世界は、神の奥義の世界は、これは本当に神秘です。体験してみなければ分からない。けれども、いわゆる摩訶不可思議ではない。御言と離すことができない。御言の世界と霊の世界は、霊と言とはこれまた一如の世界です。

そういう角度で聖書にぶつかってください。身体(からだ)で読んでください。「身読(しんどく)」という言葉も日蓮が言った言葉だ。佐渡に行くときに弟子に、

「法華経を頭で読む人はたくさんある。心で読む人はだいぶ少ないが、お前は身体で読め」

と言った。身体で読むとはそのドラマの中に自分を入れることです。

自分を投げ捨てていると、逆放物線（上昇）のカーブになる。パウロが言ったでしょ、

「肉体はだんだん古びていくけれども、うちなる人は日々に新たなり」

と。御霊の世界は逆カーブになる。自分の信仰の世界は放物線（下降）のカーブになる。「わが信仰」なんて言っているとね。だから、私は、

「絶信の信。自分の信仰にも絶しなさい。そうすると、キリストの信が来ますぞ。自分の信仰なんか当てにしなさんな。ああ、なんとキリストは素晴らしいか。ただそれだけです」

と言う。そして、それを受けとるだけ。

「今やキリスト・イエスに在る者は、

と言ったのは、今のような信の現実が「キリストのうちに在る」ということで、そういう「の中に在る」ということをパウロがこのローマ書8章の第1節で言っている。だからもう、

罪に定められることはない」

という。キリストの中にあるから。なるほど、枝葉の罪は立つかもしれません。けれども、もはやキリストによって完全に救われている。内側から。だから、無条件の世界です。

●霊界の法則

「キリスト・イエスに在るところの生命(いのち)の御霊(みたま)の法(のり)は」

この「御霊の法」を霊法と私は申しています。

この自然界は物理の法則、自然の法則。木の葉が揺れている。あれはちゃんと風の強さによっていろいろになる。非常に寸分たがわず物理法則です。物理法則の素晴らしいのを、「ああ天然は素晴らしいな、天然は自然だな」と言う。物理法則を「自然」と言っている。カントが自然の法則の世界を、

「これを思えば思うほど、しばしばこれを顧みるほど、いよいよもって自分が驚嘆する二つのものがある。わがうちなる道徳の法則と星辰の空である」

と言った。自然界の法則と、人間の世界の道徳法、道徳律です。カントの『実践理性批判』を読まなければ、道徳のことを言ってはいかんと言ってもいいくらい素晴らしい本です。

「我、なすべきがゆえに、なし能う」

とまで彼は言ってしまった。それくらいに彼は道徳法則の世界を端的に受けとっていた。もちろん、カントはプロテスタントで、信仰から発していますよ。ルターなくしては、カントもゲーテもないというくらい、ドイツ文化では何といったってルターが親玉です。ルターは源泉です。

その道徳法則と、もう一つ、霊界の法則がある。これを霊法という。「奇蹟」なんて言うでしょ。奇蹟なんかないんですよ。分からないから、奇蹟なんて言っているけれども、ちゃんと霊的法則が働いているだけのはなし。神さまの御意が自由に働いている。みなこの霊的法則が動いている。キリストが湖の上を渡って来た。キリストは物理法則を超えてしまっているんだ。本当にこれを受けとっているでしょうかね、みんな。

「まぁ聖書に書いてあるから仕方がない。あれは物語だ」

なんて、宗教的物語くらいにしか思っていない人がたくさんあるよな。物語ではない。キリストの霊の世界は物理法則を超えている。だから、霊法の世界であって、奇蹟でも何でもない。一番凄いのは、五千人の人に二つの魚と五つのパンで与えたという。これはもう絶対に我々には分からない。キリストの無限の生命、これはみんなキリストが神さまを本当に信受していらっしゃるから。このキリストの信受の神の力が働いている。神の本願が働いている世界です。

キリストの信仰が素晴らしいのではない。キリストの信は全く神の力が働いている事態です。キリストはいわゆる「自分の信仰」を何ものとも思わないくらいです。

「汝の信仰、汝を救えり」

とキリストは言われたですね。たびたび言っておられた。「汝の信仰」というのは、「お前の信仰が強くなったから」ではない。

「お前が私をこんなに受けとったから、だから、お前は救いとなったんだ」

ということ。

「お前はこんなに受けとってくれたか。そうしたら、私の力がお前に働いたんだよ」

と。あの言葉にまた躓かないでください。そうすると、

「私は信仰がまだ薄いから、もっと信仰を厚くしなければダメだ」なんて思う。そうじゃない。信仰すら、私したらダメです。

そういう信の世界。パウロはここでもって、「霊と肉」と言ってますが、「霊」とは神・キリストを一切とし中心とすることを「霊」といいます。「肉」というのは、どんなにそれが立派であっても人間中心は全部、「肉」です。いわゆる肉情ではないですよ。神さまが与えてくださったものは、私たちの感覚や何でも、五感は全部いい。それを神中心に動かしているか、自分中心であるか。そこで霊か肉かが決まってくる。キリストは結婚だって何だってみんな祝福された。独身であることがなにも清いのでも何でもない。マルチン・ルターや親鸞がそこをハッキリ受けとっていたわけです。それが神中心の生活であるか、いわゆるマイホーム主義であるか。

日本人は全くエコノミックアニマルだね。情けない国だよ。本当の大和魂とか日本精神というのはそんなものではなかったはずです。封建制度はわるいところがあるでしょう。それと一緒に善きものをみんな捨ててしまっておかしなことになってしまった。これは学校の先生方も家の両親もハッキリ権威をもって若い人たちを、子どもたちを躾(しつ)けていかなければダメです。そのためには、根源にはどうしてもこういった福音を受けとっていなければダメなんです。もうこれくらいハッキリしたことはない。

神・キリストを受けとって、縦の関係をしっかり立てていることが「信」ということだということ。この絶対者との関係があるところが「義」である。この関係をもってキリストを受けとっているところが「信」の世界である。自分の信仰ではない。キリストを本当に生きること。御霊のキリストが自分の中に生きていること。それが「信」の本当の姿である。だから、

「御霊なき者はキリスト者にあらず」

信者でないと。ローマ書8章9節で言っている。信仰の世界も聖霊を離しては本当は語れない。

大体、17節までが、この御霊を中心とした信仰の事態が、パウロのローマ書8章の根本精神だと思います。